



それと後半は、このストーリーの中で「女達が見ています、女たちが見ています」というところに、「エルサレムの裁きのことをあなた方は泣きなさい」という箇所があるのは唐突な感じもするわけですが、ここにその話があって2人の犯罪人一緒につけられた2人の犯罪人の1人の方は、この民衆と役人たち兵士どもと同じように罵るということですね。もう1人の方は、この方は何も悪いことしてないと言って、信仰告白をするのだね。御国の権威を持っておいでになるということを書いて、「あなたは私と一緒に園にいる」と言われる。太陽が光を失い聖所の幕が真ん中から裂けて霊を御手にゆだねますという死のところですね。そのところは「エルサレムが裁かれる日」「十字架に付けられている」「一人は救われている」「イエスの過ぎ越しのいけにえとしての十字架」という4つに分けられるかなと見ました。

ここで見ていた時に、「2人のうちの1人、2のうちの1人」というもしくは「身代わりに」というようなところが見えてるなあとこの前の段落の引き渡すところでも、イスカリオテのユダとペテロという二人の人がいましたね。このバラバとクレネ人、シモン。1人の強盗ともう1人の強盗というところがあって、それがこのアザゼルのいけにえ、レビ16章にある贖罪の日、ヨムキプールの大祭司が年に1度至聖所に入る日。このいけにえの時にアザゼルと言って主のためとアザゼルのためと。2頭のやぎがいて、1頭は殺されて、1頭はその血を打って離されるというそのアザゼルのやぎの話が大祭司が至聖所に入る時のいけにえとして出ていますよね。そのアザゼルのように、1人が釈放する。でも実は、この十字架を負わされている方が救われているってというような形。ちょっと話がひっくり返ったりしますけれども、「2人のうちの1人」というのがこのアザゼルのいけにえの話の連想するように書いてあるんだろうなというふうに思いました。

この(23:44)光を失い聖所の幕が裂けましたというところは、至聖所と聖所の間に分ける幕ですね。至聖所に入れるようになったという意味と、神様が至聖所から出たという意味と、複数の意味があると思います。至聖所が分かれて聖所に入るというこの贖罪の日のいけにえがの聖所の話。それと、御霊が神様の方に返される、息が引き取られるということで、いけにえとして捧げられている時に、この聖所の中に入ることができるための贖罪の日のいけにえとして十字架ということが、この中で暗示されている、隠喩されているということなんだろうというふうに見ました。ですから、「十字架のいけにえ」と言っている時に、これ全体は過ぎ越しのいけにえとして、神の子羊が捧げられたということですが、それと同じように、「贖罪の日のいけにえ」として大祭司であるイエス様がいけにえになっているということを表している1月の祭りのいけにえ、7月の祭りのいけにえの一番大きな大切ないけにえということ、この十字架のストーリーの中で話しているのかなと思います。

それでアザゼルのこの話は、ヘブル人への手紙の9章、10章のところに、イエス様はその贖罪の日のいけにえとして捧げられたので大祭司が至聖所に入るという話と一緒に考えてくださいということとずっと説明してくれていますので、そこは見なければいけないねということですね。

エルサレムが崩壊する話は、じゃあ何なんだろうということなんですが、ルカでは言わないんだね。ルカでは言わないんですけど、マタイ福音書6章、ヨハネ福音書2章で言っているように、ご自分の体を3日で建てるということを使う。「3日で建てると言ったんだから」と言われてるところです。その3日で建てると言っている時には、ご自分の体のことを神殿として話している。(23:27-31)(23:44-49)神殿とエルサレムの裁き、エルサレムの神殿の裁きというのが並行しているものなんだろうということですね。ですから、(23:44-49)過ぎ越しのいけにえになって新しい民を救い出す。(23:27-31)それは

古いイスラエルをさばいて、まるでバビロン、エジプトのようになってしまった強盗の巢であるエルサレムから救い出すというストーリーですね。この2つが並行しているので、こっち(23:44-49)は、最初の過ぎ越しの成就のいけにえです。それは(23:27-31)この贖罪の日のいけにえによってエルサレムがさばかれて新しいエルサレムが築かれるということの十字架ですよということを、この2つで表してるのかなと。

これらの救う話は、預言者たちが待っていたと言われてるように、預言者たちの待っていたものですよということを、ルカ福音書の最初のところでずっと説明しています。その中で、最初からこの人は正しい人だったと言っているのですが、正しい人というのが何人か出てくるうちの大切なのは、1章6節でヨハネのお父さんのゼカリヤは正しい人だったという風に言われています。それとここに出てくるシモン。正しいシモンがエルサレムの贖いを待っているシモンは、2章25節「エルサレムにシメオン、シモンという人がいた。この人は正しい人、イスラエルのあがないを待っている」ということです。この人が御霊に感じて宮に入るとという話です。その正しいゼカリヤ、正しいシメオン、そして毎年過ぎ越しの祭りにはエルサレムに行っていた。12歳になったイエスが宮に入ってというところがここにありますね。そのゼカリヤとシメオン。そしてマリアに言われていることが、ここで成就しているところなのです。(1:31-)マリアの所にガブリエルが来ます。ガブリエルが来てその子の名をイエスとつけなさいと言っているところで、「その人はいと高き方、神の子と呼ばれます。それでその神である主は彼にその父ダビデの王位を与えます。こうしてヤコブの家を治めその国は終わることがありません。」と言っている「神の子」、そして「ユダヤ人の王」ということがこの2つで言われています。それと同じようにゼカリヤも言います。このシメオンのところですね。「(2:31-)救いはあなた方万民のために備えられたもので異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄」。(23:1-12)万民異邦人を照らす啓示の光を十字架につける。(22:63-71)御民イスラエルの光栄を十字架につける。この光、光を失うのです。この2つに対して逆らってるというシメオンの言葉に対する逆らっているものとしても見ることができるし、このガブリエルがマリアに約束したように、神の子であり、ダビデの子が来ましたということも、この2つを区別するものだという風に思われます。

(23:27-31)このイエスが死ぬと言って泣いている人たちに対して、悲しみ嘆いてやまない女たちが来たところで、自分自身のためエルサレムのために泣きなさいというふうにイエス様がいうところがありますね。これはシメオンが、2の35でイスラエルの母マリアに言うんだね。「イスラエルの多くの人が倒れ、また立ち上がるために定められ、また反対を受けるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです。」と言われているようなところが、ここで成就しているということも言えます。シメオンがマリアに言っているところ、それがここに女の話があるよということです。

(23:22-26)それとクレネ人シモンの話がありましたね。クレネ人シモンという人は何だろうってすごく目立つのですが、3度否定して、最後に何か話があるというのは、この前の段落の引き渡すところだと、ペテロが否定して最後に立ち返るという話があって似ている感じはします。ここでシモンというクレネ人については、マルコ福音書の方だと「アレキサンデルとルボスの父シモン」とわざわざ名前前の説明がついているんだね。クレネ人という人達は誰でしょうということなんですけど、使徒11章、13章を見るとアンテオケの教会にクレネ人たちがいます。もしかすると、この十字架を負わされた人はルカの10章で言われているように、「多くの苦しみを受けて殺されて十字架にかけて三日目によみがえる。誰でも私についてきたいと思うなら自分を捨て自分の十字架を負って私についてきなさい。」という箇所、具体的にシモンという人が十字架を

負わされて、私の後をついていくということをされて、この人はクリスチャンになったんでしょうと思う箇所ですよね。そのシモンを通してクレネ人たちが福音を聞いて信じるようになると。ローマ人への手紙の16章に、ルポスという人がいるのですが、もしかするとこのルポスは、ルポスという名前がマルコのルポスと2つで、2人しか出てこないんですけど、このシモンの息子ルポスという人に信仰が相続されているということなのかなと思います。バラバはヘブライ人じゃないのですが、バラバという名前を聞くと、ヘブライ語やアラム語的には、父の子というふうにBarabba父の子というふうにも聞こえるようです。父の子と呼ばれているバラバを釈放したけど、救われているのは、十字架を負わされたシモンであるという意味で、先ほどのアザゼルの話で、バラバとシモンというのも比べなければいけない人物として書かれてるのかなと思います。

全体としては、(22:63-23:26)この長である祭司長、律法学者、異邦人の長が十字架につけると、(23:27-49)その人達に先導された民衆達が十字架につけるというこの大きな2つのくりでこの段落を見て、その十字架につけられたイエスはこの預言されていた苦しみを受けているんだと。その苦しみは過ぎ越しのいけにえとして、贖罪の日のいけにえとしての苦しみであるというのが、この段落の全体のテーマかなと思います。